

## 誤伝の背景——『沙石集』の和歌説話から——

橋本正俊

一

『沙石集』には巻五を中心に、多数の和歌が収められている。諸本によりその数は異なるが、日本古典文学大系本を底本とする『新編国歌大観』では、連歌・漢句を含めて一六番までの歌番号が付されている（異本歌を除く）。

ところで、『沙石集』の中には詠み人の名前や詠まれた背景が、同じ歌を収める他の勅撰集や私撰集・私家集などと異なるものもいくつかある。例えば巻五「有心の歌の事」冒頭には次の歌が挙げられる（米沢本を底本とする新編日本古典文学全集（以下、新編全集）に拠る）。

鎌倉の大臣殿の御歌に、

鳴子をばおのが羽風にまかせつつ心と騒ぐ村雀かな

ここで「鎌倉の大臣殿」とは源実朝のことである。新編全

集のこの歌の頭注には次のようにある。

実朝の歌の中には見えない。『撰集抄』巻五には覚尊聖人の歌として記載される。覚尊は『発心集』巻二には、「東塔の鎌倉に住む覚尊上人」とある。誤伝があるか。（以下略）

『撰集抄』では覚尊と乞食僧との会話の中で詠まれている歌が、『沙石集』では実朝の歌となっているのである。頭注はおそらく、その「誤伝」の背景に「鎌倉」に関係して何らかの混乱・混同があったのではないかと推測しているものと思われる。

このような詠み人に関する誤伝、或いは異説といったものは、『沙石集』に限らず多くの説話集や物語、また歌集にも見られるものであり、なにも『沙石集』のみの特徴ではない。そしてそれぞれの誤伝・異説発生の背景には、現存の文献では推測の困難な事情、つまり単純な誤写や勘違

いから、伝承の中での誤解や類話の交錯等々があつたと考えられる。今それらの背景を明らかにできるものは多くはないと思われるが、本稿では『沙石集』に引かれる一、二の異説を伝える和歌を検討し、それらの説の發生にどのような背景があるのか、考察したいと思う。

## 二

『沙石集』巻五「哀傷之歌の事」は、冒頭「和歌を綺語と云へる事は」で始まり、「離別哀傷の思ひ、切なるにつきて、心の中の思ひを、ありのままに述べて、万縁を忘れ、この一事に心澄み、思ひ静かなれば、道に入る方便なるべし。」とする。すなわち、和歌にも色々あるが、離別哀傷の和歌はとりわけ仏道に入る方便となるという。最初にこのように断つているだけに、この後、十首ほどの離別哀傷の和歌説話が続く。その中には、僧正遍昭の、

みな人は花の袂になりけり苦の衣よかはきだにせよ  
のように著名な歌もあるが、藤原為家が娘為子に先立たれて詠んだ、

かの髪をもて、梵字を縫ひて、供養の願文の奥に

我が涙かかれとしてもなでざりしこの黒髪を見る

ぞ悲しき

などは、近年紹介された為家の歌集『秋思歌』で初めて確認されたものである。しかし『秋思歌』が直接の典拠とは考えられず<sup>二</sup>、無住がどのようにしてこの歌を知り得たのか興味深い。この他の歌についても、歌集などから正確に詞書と歌を抜き出したとは考えにくいものもあり、資料を集めて編纂したというよりも、繋がり配慮しながらも思いつくままに書き連ねられたと考えられる。

さて、「哀傷之歌の事」のうち、梵舜本では他の本に見られない次の歌が引用されている。

一、昔或人モ、子ヲ奈良ノ都ニヲキテ、

人ノヲヤノ心ハヤミアラネドモ 子ヲ思フ道ニ

マヨイヌルカナ

この「人の親の」歌は藤原兼輔の代表的な歌の一つとしてよく知られている。『後撰集』に入集していて、その詞書は次の通りである(雑一<sup>1102</sup>)。

太政大臣の、左大将にてすまひのかへりあるじし

侍ける日、中将にてまかりて、ことをはりてこれ

かれまかりあかれけるに、やむごとなき人二三

許とぞめて、まらうど、あるじ、さけあまたゝび

のゝち、ゑひにのりてこどもうへなど申けるつ

いでに

兼輔朝臣

人のおやの心はやみにあらねども子を思道にまどひぬ

る哉

藤原兼輔が相撲の還饗の後の席で、子供について詠んだ歌であることがわかる。『兼輔集』の詞書は、「このかなしきなどひとのいふところにて」となっている。また『大和物語』第四十五段は同歌の歌物語となっていて、兼輔が醍醐天皇の御息所となつた娘（桑子）を案じて詠んだ歌となっている。『後撰集』『大和物語』からこの歌の詠まれた背景がよく分かる。また、『源氏物語』にも引歌としてしばしば用いられていることから、子供に対する親の愛情を詠んだ歌として早くから親しまれていたことは疑いない。『沙石集』梵舞本も、この前には小式部内侍に先立たれた和泉式部の歌、後にはある人（俊成）が病重くなり子供に行く末を心配して詠んだ歌などが並んでいるように、子を案じる歌として周知の「人の親の」歌を引いたのにすぎないだろう。

しかしここで問題となるのは、『沙石集』の詞書に、「昔或人モ、子ヲ奈良ノ都ニヲキテ」とあることである。前掲『後撰集』をはじめ、「人の親の」歌の詞書に子供を奈良の都においたとしているものは見当たらない。「人の親の」歌は、その歌のみが広く知れ渡り、具体的な歌の背景などはさほど知られていなかったかとも推測される。無住も『後撰集』の詞書まで確認することなく、この歌のみを知って

いたとしても、「子を奈良の都にをきて」とはどこから出てきたのだろうか。

「人の親の」歌に同様の詞書のもので無い以上、無住自身か或いはそれ以前に、何らかの誤解が生じた可能性があるだろう。ここではその可能性をうかがわせるものとして、『宝物集』を挙げる。『宝物集』は十二門の第六「懺悔」のうち「刹利居士の懺悔」について説く中で「親の子をおもふ事、わが身にかふるためし、少々かんがへ申べきなり。」として、子を思う親の説話を挙げていく。その後「昔今の人、子をかなしめる事、歌にて申侍るべし」として、『沙石集』と同様のテーマのもとに、和歌を挙げるのである。第二種七巻本では次の五首を挙げている（吉川本を底本とする新日本古典文学大系（以下、新大系）に拠る。歌番号も同書に拠る）。

中納言兼輔

379 人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまよひぬるかな

藤原基俊

380 いとけなき我子をならの里に置いて今夜の月に面影ぞ立つ

藤原兼房

381 五月關子こひの杜の時鳥人しれずのみ鳴わたるかな

太宰大式重家

382 ひな鶴のはねの林に入ぬれば飛立までにものうかりけり

中納言雅頼

383 子を思ふ道をぞ祈るすべらぎにつかふるあとをたがへざらん

ここで注目したいのは、379「人の親の」歌と並んで、380

「我子をならの里に置いて」とする基俊の歌が挙げられていることである。なお、この歌群を含む『宝物集』巻六の古鈔本は現在確認されておらず、『宝物集』諸本の内、片仮名古活字三巻本では379「人の親の」歌のみを、久遠寺抜書本では379・381・383の三首のみを挙げている<sup>30)</sup>。しかし、おそらくは第二種七巻本の古鈔本が存在する鎌倉時代から、379とともに380も挙げられていたと考えてよいだろう。ここから、子を思う親の歌として、当時「人の親の」歌や「いとけなき」歌が想起されていたことが知られるのである。

380 「いとけなき」歌の背景は、『基俊集』や『栴葉集』の詞書から知られる。

月のおもしろきよ、ならに侍るこのこひしく侍りしかば、永縁そうつづのもとにいひやりし

いとけなきわが子を奈良の里に置きて今宵の月に面影にたつ  
(基俊集・147)

僧都、光覚童に侍りける時、花林院の僧正のもとにつけて侍りけるが、こひしくおぼえけむ、月のころよみてつかはしける 前左衛門基俊

いとけなきわがこをならのみやにおきてこよひの月のおもかげにみゆ  
(栴葉集・607)

基俊が奈良興福寺の永縁のもとに預けていたわが子(光覚)が恋しくなつて、詠み送った歌であることが知られる。同じく基俊が奈良のわが子を思いやった歌は、この他にも『基俊集』に数首詠まれている。「いとけなき」歌は、『新編国歌大観』ではこの他『夫木和歌抄』にしか確認できず、「人の親の」歌ほどには広まらなかったと考えられる。しかし、歌自体にわが子と離れている状況と、わが子への切実な想いが表現されているのであり、『宝物集』が選んだように、子を思う親の歌のテーマに最適な歌の一つであったことは間違いないだろう。

さて、共に子を思う親の歌である「人の親の」歌と「いとけなき」歌が混同され、「人の親の」歌が奈良にある子供を思いやった歌と誤解されたと考えれば、そのまま『沙石集』に繋がるのであるが、そのような誤解は簡単に起こ

るものなのだろうか。例えば『宝物集』から<sup>379</sup>「人の親の」歌と<sup>380</sup>「いとけなき」歌が抄出され、詠み人が省略されて伝えられることなどがあつたのだろうか。しかし、単純に『宝物集』を誤解発生の起点と考へてはならないだろう。この二首が混同して用いられた、『宝物集』や『沙石集』の背後に流れる世界を想定してみる必要があるのではないだろうか。

### 三

ここで視点を変え、『沙石集』の別の和歌説話を見てみたい。

『沙石集』巻五「学生の歌好みたること」には、源信が和歌を好んだ著名な説話が引かれている。

恵心の僧都は、修学の外他事なく、道心者にて、狂言綺語の徒事を憎まれけり。弟子の児の中に、朝夕心を澄まして、和歌をのみ詠するありけり。「児どもは、学問などするこそ、さるべき事なれ。この児、歌をのみ好みすく、所詮なき物なり。あれ体の者あれば、余の児ども見学び、不用なるに、明日里へ遣るべし」と、同宿によくよく申し合はせられけるをも知らずして、月冴えてもの静かなるに、夜うちふけて縁に立ち出で、

手水つかふとて、詠じて云はく

手に結ぶ水に宿れる月かげのあるかなきかの世にもすむかな

僧都これを聞きて、折節と云ひ、歌の体、心肝に染みて哀れなりければ、その後、この児をもとめて、歌を好みて、代々の集にも、その歌見え侍るにや。

ある説には、近江の湖に、船にはるはると行くを見て、この児、詠じて云はく、

世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎゆく船の跡の白浪

と詠じけるを聞きて、歌を好まれけるとも申し侍り。先の歌は實之が歌、後の歌は満誓が歌なり。折に古歌を詠じたるにこそ。…… (米沢本)

『沙石集』諸本に引かれる説話である。和歌などの狂言綺語を嫌っていた源信だが、児の口ずさんだ和歌を聞いて心に染み、以後和歌を好むようになったという。さて、『沙石集』はこの説話について二つの説を挙げている。一つ目は児の口ずさんだ歌を「手に結ぶ」歌とし、二つ目は「世の中を」歌であつたとしている。そして最後に無住自身が、一つ目は紀貫之の歌であり、二つ目が満誓の歌であるので、この歌は児が作ったものではなく、児は「折に古歌を詠じたのだと注を加えている。無住の指摘の通り、「手に結ぶ」

歌は『拾遺集』哀傷<sup>1322</sup>に、

世の中心ほそくおぼえて、つねならぬ心地し侍り  
ければ、公忠朝臣のもとよみてつかはしける、  
このあひだやまひおもくなりにつけり

紀貫之

手に結ぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にこそ  
ありけれ

とある。また「世の中を」歌は、『万葉集』卷第十二にあるが、やはり『拾遺集』哀傷<sup>1327</sup>に、

題しらず

沙弥満誓

世の中をなににたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあと  
のしら浪

として入集している。

さて、同様の源信説話を引く他の資料を見てみると、『沙石集』が「ある説には」としている、二つ目の和歌を挙げ  
る説が見られる。

恵心僧都は、和歌は狂言綺語なりとて読み給はざりけるを、恵心院にて曙に水うみを眺望し給ふに、沖より舟の行くを見て、ある人の、「こぎゆく舟のあとの白浪」と云ふ歌を詠じけるを聞きて、めで給ひて、和歌は観念の助縁と成りぬべかりけりとて、それより読み給ふと云々。  
(袋草紙)

彼の恵心の僧都は、和歌は綺語のあやまりとて、読み給はざりけるを、朝朗に、はるばると湖を眺め給ひける時、かすみわたれる浪の上に、船の通ひけるを見て、「何にたとへん朝ぼらけ」と云ふ歌を思ひ出だして、をりふし心にそみ、物あはれにおぼされけるより、「聖教と和歌とは、はやく一つなりけり」とて、其の後なむ、さるべき折り、必ず詠じ給ひける。(発心集)

これらの資料では「児」が登場しないなど内容に小異があるが、「世の中を」歌を挙げている点では同じである。これらの資料の成立年代から、単純に説話発生の前後関係を決定できるものではないが、この源信説話の和歌は、始め「世の中を」歌として知られていたけれども、ある時から「手に結ぶ」歌もそれに替わって登場し、無住の頃には両方がともに語られていた、と推測することができる。この説話の主題は、恵心が和歌を好むに至った経緯であり、そのきっかけとなる和歌はそもそも特定の歌である必要はなかったのかもしれない。しかし、この二つの和歌には共通項があった。すなわち新編全集の頭注に指摘されるように、二首ともに『拾遺集』哀傷部に収録されるのみならず、「ともに『和漢朗詠集』巻下・無常にも収録されて、世のはかなさを詠じた歌として人口に膾炙した歌だっ

た」のである。この二首は、『和漢朗詠集』「無常」に並んで挙げられているのであり、十世紀末から十一世紀初頃にはともに無常の歌として知られていたことがうかがえる<sup>(30)</sup>。では『和漢朗詠集』以降どのようにこの二首が詠まられていたのか、もう少し見てみたい。

「手に結ぶ」歌は、『宝物集』にも引用されている。巻第二、仏法の大切さについて「諸法の空なりと観ずること、仏法の大意」であると説く場面である。

又、維摩経の十喻にも、此身は水にやどれる月のごとし、入月のごとし<sup>(31)</sup>、芭蕉の「ごとし」、夢の「ごとし」など申ためれば、諸行を空と観じて、仏法を宝とおぼすべき也。

維摩経の十喻の心、昔今の歌にもよみて侍るめり。少々申べきなり。

紀貫之

76 手に結ぶ水にやどれる月影の有かなきかの世にも  
すむ哉

源順

77 世中を何にたとへん秋の田のほのかにてらす宵の  
いなづま

大納言公任

78 風吹ばまづやぶれぬる草の葉にたとふるからに袖  
ぞ露けき

権僧正永縁

79 なぎき夜の夢の中にて見る夢はいづれうつつとい  
かざさだめん

源仲綱

80 浅茅はら末葉にすがる露の身にもとの雫をよそに  
やは見る。

されば諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽と観  
ぜん人、仏法の宝をまうくるもの也。

ここでは諸法空・諸行無常を観じる歌として、『維摩経』の十喻の心を詠んだ歌を挙げている（久遠寺抜書本でも79永縁歌を除く四首が引用されている）。その冒頭に「手に結ぶ」歌が挙げられているのである<sup>(32)</sup>。ここにもやはりこの歌が空観・無常観の歌として知られていたことがうかがえる。一方の満誓の「世の中を」歌は、その内容が『維摩経』の十喻とは関わりがないのでここでは引かれていない。しかし、それに類似した源順の77「世の中を」歌が挙げられている。順の歌の「いなづま」は『維摩経』の十喻の一つ「電」と対応しており、また『宝物集』前掲引用部分の直前で引かれる經典のうち『金剛般若経』の「一切有為法 如夢幻泡影 如露亦如電 応作如是観」とも対応し

ている。

この順の歌は、『源順集』に、

応和元年七月十一日に、よつなるをんなごをうしなひて、おなじ年の八月六日に、又いつつなるをのこ子をうしなひて、無常の思ひ、ことにふれておこる、かなしびのなみだかわかず、古万葉集の中に沙弥満誓がよめる歌の中に、世の中をなにしたとへんといへることをとりにて、かしらにおきてよめる歌十首

として詠まれた十首の歌の七首目で、満誓の歌の上二句を借りて詠んだ無常の歌であることが知られる。『万葉集』読解にも携わった順が、満誓の歌に着目したのであろう。この後、先述のように満誓の歌が『和漢朗詠集』『拾遺集』にも引かれることとなる。

さて、順は「世の中を何にたとへん」で始まる歌を十首詠んだのであるが、『後拾遺集』に「ほのかにてらす宵のいなづま」のみが入集したことで、この歌が特に知られるところとなったようである。『宝物集』の引用もその影響に拠るのであろう。<sup>(5)</sup>ただし、『宝物集』作者も読者も、順の「世中を何にたとへん」で始まる歌に、当然満誓の「漕ぎ行く舟の跡の白浪」歌も想起していたことであろう。『和漢朗詠集』『拾遺集』に入集した満誓歌は、『方丈記』にも「若跡ノ白浪ニコノ身ヲ寄スル朝ニハ、岡屋ニ行キカフ

船ヲナガメテ満沙弥ガ風情ヲヌスミ」とあるのが知られるように鎌倉時代には無常を代表する歌となっていた。また『撰集抄』巻一第六話には、

世中を何にたとへん、あさ朝漕行舟の跡の白波の消ぬめるは。秋の田をほのかに照す宵の稲妻の、やがて光の見えざんめるは。僅にしら波の立ながら、光ほのめくにはかされて、年はいたくたけぬれど、<sup>(6)</sup>

として、「漕ぎ行く舟の跡の白浪」歌と「ほのかにてらす宵のいなづま」歌を併せて引用されているのである。「世の中を何にたとへん」の歌として、この二つが代表的な歌として広まっていたのではないか。これらのことから『宝物集』以降には、諸法空・諸行無常の歌として、紀貫之・満誓そして源順の歌がしばしば取り上げられていたことがうかがえる。ところで、『宝物集』は十二門の「観念」の中でも、「空観」を取り上げて説明をしている。

次に空観と申は、色即是空の思ひをなして、諸法空としり、無大無小の観をいたして、一切有と思はぬなり。

観身岸額離根草 論命江頭不繫船

この故に、人もむなし、我もむなし、是もむなし、彼もむなし、浄土もなし、地獄もなし。

「観身……」の句はやはり『和漢朗詠集』『無常』に引かれる句である。『宝物集』は空観をテーマとする歌のうち、

『維摩經』の十喩の歌をすずに引用していたためか、この「空観」の項目ではそのような譬喩を詠んだ歌ではなく、402色にのみそめし心の悔しさに空しととける法ぞうれし

き

など、「空し」の語を含んだ歌ばかりを挙げている。しかし、『宝物集』二巻本では、「この「観身……」の句の後に、

世中をなにいたとへんあさばらけこぎ行舟のあとの白  
なみ

の満誓歌を挙げているのである。おそろく、『和漢朗詠集』の連想に拠るまでもなく、空観を詠んだ著名な満誓の歌を引いてきたのである。このように、満誓・順・貫之の歌はいずれも空観を主題とした代表的な歌として連想されていたことが確認できる。これらの歌は空観・無常観の歌の代表として、中世の法談や唱導に際しても、しばしば利用されていたはずである。

源信の説話は、『沙石集』では和歌の狂言綺語観を説くための説話として用いられていた。しかしそこでの和歌は無常観・空観といった「観念の助縁」（袋草紙）を説くものであった。無常観・空観を説く場で「世の中を」歌と「手に結ぶ」歌が併せて引かれ続ける中で、源信の説話が共に引かれたとき、「手に結ぶ」歌もまた源信説話に結び付けられる契機が与えられたのだらう。

#### 四

同じテーマのもとで説話と和歌とが並んで引かれたとき、和歌は容易にその説話と結びつき新たな和歌説話が生まれる。

『宝物集』巻第二「六道」の「地獄道」を説く中で、かの有名な醍醐天皇の墮地獄を描く、日藏上人蘇生譚が引かれている。

金峰山の日藏上人は、無言断食にて行じけるほどに、秘密瑜伽の鈴をにぎりながら死いり侍りける。地獄にして延喜の聖主にあひたてまつる。御門、上人を見給ひてのたまはく「地獄に来るもの、ふたゝび人間に帰る事なし。汝はよみがへるべきものなり。我、父寛平法皇のために不孝なりき。また、無実をもつて菅原右大臣を流罪したりき。この罪科によりて、今地獄に落て苦患をうく。かならず皇子にかたりて苦患をとらふべし」と仰事ありければ、かしこまりてうけ給ければ、「冥途には罪なきをもつてあるじとす。上人われをうやまふ事なかれ」と仰られけるこそかなしく侍りつれ。

高岳親王

102 いふならく奈落の中に入りぬれば刹利も首陀もかはらざりけり

この歌こそおもひあはせられてあはれに侍つれ。

地獄に堕ちた醍醐帝の「冥途には罪なきをもつてあるじとす。上人われをうやまふ事なかれ」の発言に思い合わせて、高岳親王の「いふならく」歌が引かれている。この説話と和歌とは、『宝物集』が独自に結び付けたものではなく、当時唱導などで併せて語られていたものではないかとも推測されている<sup>102</sup>。ところで、『宝物集』の影響を受けていることが指摘されている『延慶本平家物語』<sup>103</sup>は、第六巻末で後白河法皇が行幸先の寂光院で「六道四生三途八難之苦患ノ様」を描いた障子を見る場面で、この説話と和歌とを引いている。

延喜ノ聖主ノ地獄ニ墮サセ給テ、金峰山ノ日藏上人ニ向セ給テ、

イフナラクナラクノ底ニヲチヌレバ刹利モ首陀モカワラザリケリ

ト炎ノ中ニシテ悲セ給ケムモカクヤト哀ニゾ被思食ケル。

簡略であるが、ここでは醍醐帝が「いふならく」歌を詠じたと理解できる内容になっている。また、やはり『宝物集』との関係が指摘されている『源平盛衰記』<sup>104</sup>は、巻第八

で西行が白峰の崇徳院の墓を参った場面でも、醍醐帝の歌として「いふならく」歌を引いている。

最物サビシカリケレバ、

ヨシヤ君昔ノ玉ノ床トテモ係ラン後ハ何ニカハセ

ト読ケルハ、彼延喜ノ聖主ノ

イフナラク奈落ノ底ニヌレバ刹利モ首陀モカハラザリケリ

ト申御歌ニ思合テ哀ナリ。

醍醐帝が「いふならく」歌を詠んだという誤解は、『宝物集』の影響に拠るとも考えられるだろう。『宝物集』には古鈔本である光長寺本のように和歌の後に詠み人を挙げているものもあり、また書陵部蔵一卷本は宝物集型日藏説話で高岳親王の名前を挙げておらず「いふならく」歌が醍醐帝の歌であるかのように誤解されるおそれのある本文を有している。そういった本文の誤読から、右のような誤解が生じた可能性はある。しかし、そのようなテキストの誤読に理由を求める必要はないだろう。醍醐帝の状況と心情を的確なまでに表現した「いふならく」歌は、仏法を説く場において、その詠み人が誰であるのかはほとんど問題にはならなかったのではないだろうか。「いふならく」歌は醍醐帝墮地獄説話と並んで語られることで、一体化してしま

い、醍醐帝の歌となることとさらにその効果を増したのであるう （三三）

少し質は異なるが、別の例も見てみたい。『沙石集』巻五は、西行が讃岐に崇徳院御廟を訪ねる説話を載せる。

一、西行法師、国々修行しけるに、讃岐院の御廟に参りて、昔、十善の余薫によりて、万機の政を治め、四海の帝王として、九重の台に崇められて御座せしに、かかる松山の苔の下に埋もれ給へる事、無常転変の理を知るといへども、さしあたりては、夢の心地して、哀れに覚えるままに、

よしや君昔の玉の床とてもかからむ後は何にかはせむ

御墓の下に、かすかなる御声にて、

浜千鳥跡は都へ通へども身は松山に音のみぞ泣くこれも有名な説話であるが、新編全集が『山家集』『西行上人集』『古事談』（中略）は西行の白峰詣でと「よしや君」の歌のみを載せる。他方、『保元物語』・長門本『平家物語』『源平盛衰記』『白峰寺縁起』では、西行の白峰詣でと「よしや君」の歌を記載した上に、それ以前に生前の讃岐院が「浜千鳥」の歌を詠じたとする。本書のみが西行への返歌とするが不自然である。」と注している。今『源

平盛衰記』を見てみると、先に「いふならく」歌と併せて引用した部分が、「よしや君」歌の場面である。そしてこれよりも前に崇徳院が讃岐から御室に送った文書の奥に「浜千鳥」の歌が書き付けてあったとしているので、「浜千鳥」歌を西行への返歌とするのは不自然ということになる。「浜千鳥」は筆跡を意味するので、歌意からしても西行に対する返歌としては合わないだろう。『沙石集』でも内閣文庫本のように、「浜千鳥」歌を「一説、カスカナル御音（三三）、苔下」として挙げているものがあることは注目される。しかし『源平盛衰記』で「浜千鳥」歌を書き付けたとする文書には「昔ハ槐門崇廟ノ窓ニシテ、玉体遊宴ノ心ヲヤスメ、今ハ離宮外土ノ西海ノ浪ニクダカレテ、江南浮沈ノ哀声ヲ加フ……」とあったとしていて、『保元物語』も同様、『沙石集』に説く崇徳院の境遇の描写と重なる。もちろん、これらは配流の憂き目にあった高位の者に対する常套表現であるが、崇徳院の境遇を表した「浜千鳥」歌が西行に直面する場面で用いられることは、むしろ一層悲哀をかき立てたのではないだろうか。この説話も前掲の醍醐帝墮地獄説話と同様、身分の無常を象徴する説話として広く語られていたはずである。多少歌意はずれるとしても、王位もまた無常であるとする崇徳院の説話を語るに当たって、「浜千鳥」歌を西行への返歌として利用す

ることがあったと思われる。説話とともに語られた和歌は、より一層効果的に利用され、説話に組み込まれていく。『源平盛衰記』が崇徳院の「よしや君」歌と醍醐帝の「いふならく」歌を併せて引用しているところにも、王位の無常というテーマを通して、新たな歌の連想が生じていることがうかがえるのである。

さて、改めて第二章で触れた『沙石集』の和歌に戻りたい。兼輔の「人の親の」歌も基俊の「いとけなき」歌も、ともに子を思う親の歌であった。先に引用したように、この二首は『宝物集』十二門の第六「懺悔」のうち「刹利居士の懺悔」について説く中で挙げられている。

「刹利居士の懺悔」とは、「正法（仏法）の精神を以て正しい政治を行うこと」であり、「有相の懺悔」「無相の懺悔」とともに三種の懺悔の一つである（石田瑞麿『仏教語大辞典』）。新大系の脚注に指摘するとおり、『観普賢菩薩行法経』は「刹利居士の懺悔」について、「義空を憶念し（第一）、父母に孝養し（第二）、正法もて国を治め（第三）、六斎日に不殺を行じ（第四）、深く因果を信す（第五）」の五つの懺悔法を挙げている。この二つ目が「第二懺悔者、孝養父母恭敬師長。是名修第二懺悔法。」とする父母への孝養である。『宝物集』は「刹利居士の懺悔」の

冒頭で、

刹利居士の懺悔と云は、正法をもて国を治し、六斎日にもこの命を殺さず、境のうちの殺生をとどめ、父母に孝養するを申たる也。

として、五つの懺悔法のうち、第三、第四、第二のみを挙げ、以下にその具体例を列挙している。そして父母への孝養については、冒頭に、

父母孝養して仏に成べしと申は、懺悔の中の第一の懺悔にてぞ侍るべき。父の恩の高き事、須弥のごとし。

母の徳のふかき事は、滄海ににたり。

とし、父母への孝養が最も重要な懺悔であることを説く。そして説話と共に前掲の一群の和歌が引かれる。これらの歌の導き出す教訓は歌の後に述べられている。

是ほどに心ざし浅からぬ親のために、孝養報恩せん人、いかゞ懺悔とならずも侍らん。

これらの歌からもわかるように、親は子の事を思っているのだから、その親のために孝養を尽くすことが懺悔となるのだ」というのである。続いて、

しかりといへども、天人はたのしみにふけりて、孝養の心ざし無、三途は苦にせめられて、父母の事をしらず。たゞ人界に生をうけたるたび、父母に孝養して第一の懺悔となしたまふべきなり。

と、繰り返して孝養が最も重要な懺悔であると説く。この後にも父母に対する孝養の説話の例示などが続き、最後に父母に孝養するもの往生すべしといふ事は、是にてこそしられ侍りぬれ。これらを利利居士の懺悔の大意とす」としている。したがって『宝物集』は、「人の親の」歌や「いとけなき」歌を、父母への孝養を説くための証歌として用いていることがわかるのである。

『宝物集』は、この他にも孝養について説く場面がある。巻第一の宝物論の中で、子が宝であることを説く段である。ここでは、「人の子、親の為に宝とみゆるためし、少々申侍るべし」として、孝子伝等に引かれる孝子譚を列挙する。そして「いか成武士といへ共、親の為になき跡まで忌日報恩をせぬ者やは侍る」「人の、子なからむは、心うく悲しき事にてぞ侍るべき」など、子は親に孝養を尽くしてくれるから宝であるということを書いていく。孝養は繰り返して説かれる重要なテーマであった。

父母への孝養は、『宝物集』に見るまでもなく、仏教において重要なテーマであった。特に唱導において孝養が最も強調されるテーマの一つであったことは、多くの唱導文献が物語るところである<sup>〔五五〕</sup>。唱導では親に対する孝養を説く中で、当然のことながら子に対する親の恩愛が説かれる。近年翻刻紹介された『金玉要集』<sup>〔五六〕</sup>を例に挙げると、

第二「慈父孝養之事」で、「次恩愛ト申ハ、慈父ノ高恩ハ七万八千一百廿里、摩頂ノ積徳ハ一十三年六百日夜……」とし、「抑、父恩、不限ニ浄飯王経ニ、諸経ニ散在セリ」として經典等から親子の恩愛と孝養の説話を挙げていく。

唱導と言つても、より具体的な場を想定する必要があるが、『宝物集』に併せて引かれる「人の親の」歌や「いとけなき」歌も、このような孝養を説くために、親の恩愛を詠んだ歌として利用されていたと考えることはできるだろう。「人の親の」歌の方がより膾炙していたようではあるが、離れた奈良の地にある子供を想う「いとけなき」歌もまた、しみじみと琴線に触れる歌として、『宝物集』以降にも孝養を説く和歌としてしばしば利用されたのではないか。そこではおそらく、「昔或人モ、子ヲ奈良ノ都ニヲキテ」といった詞書きと共に一つの和歌説話として語られたであろう。そして同じく子を想う著名な「人の親の」歌が並んで詠まれたとき、この歌もまた奈良にいる子供を呼んだ歌として結びついていったのではないだろうか。『沙石集』の誤解は、こうしたところから生まれたと考えられる。いくつか例を挙げたように、その歌を誰がどのような立場で詠んだのかということはほとんど問題ではなかった。『後撰集』をはじめ諸書に引用される著名な「人の親の」歌の背景を無住が知っていたかどうかは、あまり問題とならな

いだらう。詞書に「昔或人も、子を奈良の都にをきて」とあるように、詠み人を「或人」と抽象化しているところにも、二つの歌が実際の詞書を離れて結びつき、伝えられていたことがうかがえよう。ただし、管見では梵舞本以外にはこの説話が見られないことから、結果的には無住は疑問を感じて『沙石集』から削除してしまったのだろうか<sup>(七七)</sup>。

ここでは『沙石集』の極短い和歌説話を取り上げて推測を重ねてきた。

ある和歌が別人の歌として歌集等に吸収されていくことは珍しいことではない。在原業平や小野小町、西行などの半ば伝説化した歌人たちには、多くの和歌が結び付くことで伝承が形成されていった<sup>(七八)</sup>。また道真のように人格化した人物に和歌が仮託されていった例もある<sup>(七九)</sup>。しかしここで見た例は、そのような著名な個人の権威に引きつけられたものではない。仏法を説くために引かれた和歌は、同じテーマのもとに集められた他の説話と結びつくことで、新たなイメージを獲得していったのである。

〈注〉

(一) 『秋思歌』は冷泉家時雨亭叢書『為家詠草集』所収。『秋思歌』には「なみだやはかゝれとしてしもなでこじとこのくろ

かみをみるぞかなしき」の歌があるが詞書はなく、歌も『沙石集』とは異同がある。佐藤恒雄氏は解題で、『沙石集』の形が願文の段階での定稿であったはずで、『秋思歌』の形は、それ以前の段階における草稿形であるとみななければならない」と指摘される。

(二) 片仮名古活字本は黒田彰『身延文庫蔵宝物集中巻 付片仮名古活字三卷本』(和泉書院、一九八四)、古鈔本・久遠寺抜書本は貴重古典籍叢刊『古鈔本宝物集』(角川書店、一九七三)に拠る。

(三) また、同時期成立の『三宝絵』は冒頭に、「世中は」歌を挙げている(第三句を「朝まだき」とする)。

(四) 新大系脚注には「入月」は『維摩経』に用例がなく誤写かとする。久遠寺抜書本はこの箇所、「イナツマノ如シ」としている。

(五) 新大系脚注にも示されるように、76「手に結ぶ」歌の詠む「水中月」は『維摩経』の十喻にはないが、十喻の一つに数えられることがあったようである。新聞一美「仏教と和歌―無常の比喻について―」(『論集 和歌とは何か』笠間書院、一九八四)参照。

(六) 『後拾遺集』が『宝物集』の直接の典拠となった可能性が高いことは、黒田彰子『中世和歌論攷―和歌と説話と―』(『宝物集の和歌』(和泉書院、一九九七)参照。

- (七) 『撰集抄 校本篇』(笠間書院、一九七九)の松平本に拠る。
- (八) 梁瀬一雄『校合二卷本宝物集』(碧洞沖叢書第三輯)、『萩野文庫本宝物集』(在九州国文資料影印叢書、一九八三)に よると、二卷本諸本が同様に満誓歌を引いているようである。
- (九) 法華経直談資料に限って見てみると、『法華経直談抄(金台院蔵本)』(臨川書店、一九八九)「序品」では「十界ノ諸法ハ皆無常也」と説く中で「手に結ぶ」歌を挙げている。なお、『法華経鷲林拾葉鈔』(臨川書店、一九九二)「提婆品」では源信説話で「手に結ぶ」歌を、『直談因縁集』(和泉書院、一九九八)「安樂行品」では源信説話で「世の中を」歌と「手に結ぶ」説を挙げている。
- (十) 山下哲郎「和歌の流転―「いふならく」の歌をめぐる―」(明治大学日本文学) 19、一九九一・八)。また日蔵の説話と「いふならく」歌との結びつきについては拙稿「中世説話集における日蔵上人蘇生譚」(『国語国文』67・2、一九九八・二)で論じた。
- (十一) 武久堅『宝物集』と延慶本平家物語(『人文論究』25・1、一九七五・六)、佐伯真一「畜生道」語りと『宝物集』(『延慶本平家物語考証三』新典社、一九九四)など。
- (十二) 中島秀典『源平盛衰記』と『宝物集』(『軍記と語り物』29、一九九三・七)など。

(十三) 時代を下って『一乗拾玉集』(臨川書店、一九九八)「序品」に引く同説話でも、「……ヤル方ナゲニ見ヘテ、一首ノ歌ヲアンバシケリ」と、醍醐帝が「いふならく」歌を詠んだとしている。中野真麻理『一乗拾玉集の研究』(同)に指摘がある。

(十四) 内閣文庫本は土屋有里子編著『内閣文庫蔵『沙石集』翻刻と研究』(笠間書院、二〇〇三)による。また長享本では「よしや君」歌のみで、「浜千鳥」歌は引かれていない。

(十五) 『言泉集』などの唱導資料にも多く見られる他、黒田彰氏が紹介された『孝行集』は孝子説話を集成し、しばしば話末に和歌も引く唱導資料である(『中世説話の文学史的環境』続「孝行集について」和泉書院、一九九五)。田中徳定『法華百座問書抄』の説経にみる「孝養」をめぐる(『駒澤大学仏教文学研究』4、二〇〇一・三)にも説経で「孝養が説かれた様子が示される。また徳田和夫「孝子説話をめぐる唱導と絵解き―宗教文化研究と説話の場―」(『説話文学研究』39、二〇〇四・六)参照。

(十六) 『磯馴帖 村雨篇』(和泉書院、二〇〇二)所収。最近では近本謙介「唱導の文の集成―内閣文庫蔵『金玉要集』について―」(『伝承文学研究』53、二〇〇四・三)に詳しい分析がなされている。

(十七) 諸本ではこの替わりに、次の和歌が引かれている。

ある人、母に後れて、

しばしだに忘れればこそ慰まめ面影ばかり憂きものはなし

ただし前述のように、『沙石集』はこの前後に子を想う親の歌を並べているのであり、ここには梵舜本の「いとけなき」歌が入る方が流れは自然である。

(十八) 例えば片桐洋一『小野小町追跡』(笠間書院、一九七五)などに明快に解かれている。

(十九) 数多くの道真仮託歌集が現存している。『宝鏡寺藏』『妙法天神経解釈』全注釈と研究』(笠間書院、二〇〇一)所収、渡辺麻里子「道真仮託歌集リスト」参照。

引用した本文の底本は次の通り(文中で示したものを除く)。引用に際しては、適宜濁点・句読点を施した。

『沙石集』梵舜本(日本古典文学大系)、『後撰集』(冷泉家時雨亭叢書)『後撰和歌集』、『基俊集』『栢葉集』『拾遺集』『源順集』(新編国歌大観)、『袋草紙』(新日本古典文学大系)、『発心集』(新潮日本古典集成)、『延慶本平家物語』(汲古書院、一九八二)、『源平盛衰記』(三弥井書店「中世の文学」)。

(はしもと まさとし・留学生センター非常勤講師)